

# 龍南會雜誌第四拾五號

## 論 說

### 迷信と學術との關係につきて

教授 湯 原 元 一

人間の智力は、如何に敏く且強きも、尙其の極め知らざる所あり。古より何れの宗教にても、幽現の二境を説くは、主として是れが爲めなるべし。獨り宗教之を説くのみならず、近代の大思想家と雖も亦之をいふ、カントが實世界を説き、ハルトマン、スペンサーが無意識、若くは不可思議を論ずるが如きは、則ち其の例なり。かゝれば、今日に於て、現の世界の外に、幽の世界の存在を承認するは、復た己むを得ざる次第なるが如し。今此二界を別ちて、之を學術と宗教とに配當するときは、現の世界は、學術に屬し、幽の世界は宗教に屬す。かく學術宗教、互に其の領分を別ちて立つときは、二者は今日の如くに、互に相支吾することもなく、双々相並びて存續し得るのみならず、或る點に於ては、互に其の足らざる所を相補給することをも得ん。世の學術、特に理化學等の精確に驚ける輩が、動もすれば其の所謂定律なるものを以て、既に世界の萬事は、説明を竭し得たるが如くに信するは、是れ未だ理化學の性質を知らざるものなり。理化學の智識は、精確なるには相違なきも、其の觀察は現の一界に止まり、且其の唯一の利器たる實驗も、總ての事物につきて、遺りなく施行したる次第にあらざれば、所謂定律なるものも、實は一種の假定説に過ぎず、況んや、これに由りて、併せて幽の世界をも説明を得たるが如くに思ふに至りては、妄といはざるべからず。要するに、科學の講究は、現象に止まらず、未だ本

体に踏み入れるにあらざるなり。されば理化學は、如何に進歩きたりとて、今日は勿論、將來と雖も、眞正の宗教の存立するが爲めには、其の餘地は、綽々として舊に依ること、言を待たざるなり。然るに、宗教學術の外に、迷信なるものあり、幽現二界に出入えて、勝手の振舞をなし、宗教學術を併せ妨ぐるのみならず、總て社會多數の人心を蠱惑し、其の害實に擧げて言ふべからざるものあるなり。世の教育家たるもの、教場以外に於て、眞に能く矯弊歸正の大任を完くせんと欲せば、かゝる問題は、決して冷眼に看過すべからざるなり。

幽の世界なるもの、吾人は得て窺ひ知る所にあらず。然れども、現の世界に就きては、吾人は少くも、其の一箇の通有性あることを知る。即ち天地の現象は、悉く因果の理法に支配せらるるてふ一事を識ることを得、而して學術は、實に此因果の理法を基礎として、其の成立を維持するものなり。因果の理法を承認せざるの時は、則ち又學術の成立を否拒するの時なり。然るに、彼の迷信なるものは、其の性質如何といふに、彼は正しく、此因果の理法を蹂躪して、學術の基礎を打壞せんと欲するものなり。何んとなれば、迷信の第一義は、幽の世界より、一種の勢力を假りて、之を現の世界に下し、詳言すれば、幽の世界に属すべき勢力を、現の世界に属すべき形状に於て出現せしむるが故に、該勢力は、現の世界にあるも、曾て其の因果の理法に服従することなし。若くはかく、此現の世界に、其の法律の羈絆を受けざる一種の勢力、勝手に跳梁するときは、それこそ、實に此世の大亂あるべし。ギリシヤ古代の鬼神談中に、ヘラクレスといふ勇將あり、この勇將は、ツァイスの神の子なるが、故ありて人間に降り、茲にて諸ろくの人間業にてなし難き、奇怪の所業をなして、再び上天せりと傳ふ。世の迷信家の説の如くんば、今日にも、或ハヘラクレスの降り來りて、折角に成立せる此文明の社會をも、一棒にて打

壞し盡さんども、圖り難き。よしかゝる事は、上古の傳説とするも、目下社會、特に其の下層の状態を見ればかゝる類似の迷信は、幾何となく行はれつゝあるなり。雷獸、風神、地震魚等の妄想は、漸くに跡を收めたるも、尙疫病神は、多數の推崇者を有するなり。特に彼の神道に假托せる、種々の迷信は、實に非常の毒害を流しつゝあり。要するに、迷信なるものは、學術とは、正反對の位置にあり、其の性質は、互に氷炭相容れざるものなれば苟も學術の成立を願ふものは、是非とも力を極めて、右の如き迷信を、悉く根底より打壞するの決心なかるべからざるなり。

然るに、茲に注目すべき一奇觀あり。何ぞや、右の如く、學術と迷信とは、正反對の性質を有するにも關せず、其の發達の歴史を見るときは、二者は、互に手を携へて進み、迷信學術を生じ、學術又迷信を出すてふ、一事實なり。此事實の前半、則ち迷信學術を生ずる事は、先輩にも夙に議論あれども、後半則ち學術又迷信を出すてふ事に至りては、先進の學者にも、未だ其の詳細の議論あることを聞かざれば、併せて此事にも、論じ及ぼすべし。醫學の源は、迷信にあるは、何れの國も同じやうなり。化學が錬金術に出で、天文學が占卜に基けるは、何人にも知れ渡れる事實なり。今先づ學術と迷信とが、同一人の腦裏に同居して、互に相衝突することなく、經過せるさまを、東西著名の學者に就きて、其の例を擧げん。

パラチエルズイスといふは、十六世紀の名醫にて、醫學の進歩には、大功ある人なれども、其の使用せる妙薬は深山の鑛夫、又は奇怪の老婦に學びたり。是れ恰も、守田の先祖が、夢中の神託にて、寶丹の製法を感得せりと傳ふるに似たる話なり。メランクトンは、歐洲の宗教改革にては、ルーテルと比肩し、學問はルーテルよりも深かりし人なりとも、此人は、甚だしき占星術の信仰者なりき。又今日ま

で、數學の改革家として名高き、カルダヌスは、迷信中にあつても、最も怪しげなる、手相學さへ信ぜし由なり、此他、平生ハ、痛く迷信を攻撃することに盡力せる學者中にも、一方に於ては、頗ぶる奇怪の妄想を抱きたる人も少からず。ピコ、フラン、ミランマルは、其の魔法占星術を排斥するにも拘はらず、カバッラと稱する、一種の猶太神祕教を信せり。特に天文學者として、不朽の名をなせるケプレルは、其の平生ハ、占星術の妄をいふに拘はらず、尙歴史上の大事件たる、戰爭疫病等は、慧星の出現と相關係するものと確信せり。今日にして思へば、ケプレルほどの天文學者が、支那や日本の古代の歴史家と同じく、慧星と人事との關係あることを確信せりとは、受取り難き話なれども、事實は、實に前述の通りなり。

尙は支那日本の學者に就きて、學術迷信並行の例を考ふるに、孔子孟子は、孰れも鬼神を信せり。獨り荀子は、無鬼を説き人相を非として、其の議論ハ卓見多し。唐の韓愈は、排佛論の爲めに潮洲に貶謫せられたるほどの人なりしも、一書の傳ふる所によれば、仙藥を飲みて、長命を願へりといふ。下りて宋儒の理學にさまざまなる迷信の混入せるは改めていふまでもなし、されども、元來儒教は、道○理○教○と稱せらるゝほどなれば、之を信仰するものは、割合に迷信少し。但老莊の餘流を及び所謂道教なるものの中に、怪誕無稽の説多し。今日詩人が、月を嫦娥と稱し、又は蟾蜍と名くるは、是れはもと、王充論衡に「羿請不死之藥于西王母。其妻嫦娥窃而食之。奔入月宮。託身于月。是爲蟾蜍。」とある迷信に、基きたる故事なり。此外丹砂を服すれば、飛行長生するといひ、胡麻を食すれば、世と長存之。萬物神明にも通するなといふとは、可なりの學者中にも、之を信じたるが多かりき。さて顧みて、我邦の學者は如何にといふに先づ學者として、第一に數ふべきは、聖德太子なるべし。太子ハ、有名なる佛教

の保護者にましませし丈に、迷信も少からざるが如し。守屋征伐の折りに、四天王を念ま玉ひしが如きは、誰れも知れる事實なり。次ぎには、王朝の學者なれども、王朝の學者にハ、文章家のミ後世に聞へて、經學者の性行は、多く傳はらず。菅原道真なども、詩文を能くし、政治の才幹ありとのみ聞へて、其の一体の意見は、詳にするに由なし。されども當時は、上下とも、迷信多き時勢なれば、道真も、恐らく之を免れざりしならん。そハ彼が撰びたる類聚國史、又は其の編纂に與れる三代實錄にも、當時の思想に従ひて、天災地妖の事を、尤も丁重に掲けたるにて知らる。此外令律格式、又は國史の撰者は、何れも有名の學者の手に成れるが、一とて當時迷信の跡を留めざるなし。固よりこれらの書籍は、悉く朝廷の命を奉して、撰述することなれば、假令多少の異見を有するものと雖も、其の意を枉げざるを得ざるべければ、これに由り、眞に其の撰者の意見を推斷するは、稍や苛刻の嫌ひなきにあらざるも、然れども、當時の智識の状態を考ふるときは、神佛二教、一般に社會の人心を支配するときにて、後世の如く、支那流の哲學も、未だ盛ならざりしことなれば、大概は前の書籍などに、現はれたる意見を以て、當時學者の普通の意見と視做すも、妨げなうるべし、文章家の中には、都良香、菅原文時などにつきて、幾多の奇怪のことありしは、古今著聞集、古事談などに載せて、今にも傳はれり。されども、こは文章家の事なるが上にも、本人が傳説の如くに信せしやハ、今より之を知るに由なま。道真の後に、王朝の學者中卓識の稱あるものハ、三善清行と、大江匡房たり。清行が封事にハ、僧徒の濫惡を禁ずるの條項もあれども、占星の術に長じたりといへば、之を信せしことならん。匡房は、後三條天皇に寵用せられたる有爲の政治家なれども、其の著書を見れば、此人は幽靈も信し、燄威精も信せしのみならず、小野篁が閻魔廳の冥官となりしことハ、へ、信せしが如くなり。

徳川氏以來は、佛敎稍や衰へて、學者は多く儒敎を奉ずるが故に、迷信者は、割合に減少せり。然れども、全くこれなきにあらず。今其の著しき例どもを擧げん、山崎闇齋は、佛敎を排斥之、其有名なる登愛宕山詩には、願毀<sub>ニ</sub>宮房<sub>一</sub>、黠<sub>ニ</sub>地藏<sub>一</sub>、且驅<sub>ニ</sub>杉檜<sub>一</sub>、馴<sub>ニ</sub>天狗<sub>一</sub>、と放歌せしも、其の結末には、山神使者飛鳶、<sub>○</sub>響、妙用顯然君知否。といへるを見れば、闇齋ハ飛鳶の聲は、山神の使の聲なりと信せしが如し。加之ならず、闇齋は、又猿田彦大神をば、大日靈貴の道を傳ふるものとし、庚申の日を以て、之を祀りしといふ。次ぎに物徂徠は眼千古を空ふる豪傑にて、其の「なるべし」にハ、往々古來の傳説の妄を辯せしも、其の臨死の際に雪ふりたるを見て、海内第一流の人物茂卿が、將に命を殞さんとするが爲めに、天は此世界をして、銀とならしむるといひたる由、先哲叢談に見ゆ。次ぎに當時の學者に、鬼と倅名せられたる、尤も卓抜の思想を有せし、新井白石がことにつきていはん。白石が古史通は、神代の傳説を、悉く人事とし論じ、毫も奇怪の説を容れざれども、其の鬼神論を見れば、鬼神は必ずしもこれなきものといふ信せざりしが如し。尙最後に、兒嶋不<sub>○</sub>求<sub>○</sub>といへる學者の意見を添へをか。此人は秉燭或問珍といふ書を著し、痛く世の所謂不思議のことは、決して不思議のことにあらざることを辯じ、其の中には、卓見極めて多し。之かるにも拘はらず、不<sub>○</sub>求<sub>○</sub>が、尙電雷地に落ちては、鼯とも雞とも、猫とも、人の形とも、斧とも、楔ともなるべしといひしは、前後撞着の事なり。

右の如く、學術の進歩、尙今日の如くならざるに當りては、一箇人の腦裏に學術と迷信とは、居を同ふて住めり。されば、當時にありては、學術に於ても、恰も一箇人の腦裏に於けるが如くに、亦眞正の智識と迷信とが相混同せるは敢て怪むに足らざる事なるべし、請ふ、是より更に、此智識迷信並行の例を、學術の諸分科につきて示さん。

學術の中に就き、其の中尤も多くの迷信を含藏するものは、何なるやと問はゞ、哲學こそ、第一に指折らるべし。そは斯學の性質を考へても、容易に知らるゝことなり。抑も哲學の問題となるべきことは、神の存否とか、物質心神の關係とか、総て天地人三才に關するといふやうなる、空漠なることなれば、幾多奇怪の妄想の、之に伴ふべきは、自然の勢なるべし。さればヤリシヤ古代の哲學は勿論、近代に至りても、ライブニッツ、セルリングなどいふ、大哲學者の議論にも、少からぬ迷信は、含藏せるなり。

學術の中にて、尤も精確の聞へあるは、數學に若くものなま。數學は、實に徹頭徹尾、純粹の智識なりといふも、不可なま。然るに、此精確の數學さへ、迷信は伴へり。先づ第一には數其のものに關する迷信にて、數をば、通常の意味に解釋せずして、或る概念の意味となすものなり。ピサゴラスが、一をば理想、二をば思想、四をば正義、五をば結婚、七をば時間となせるは、即ち其の例なり。周易の解釋者が、一二三四を、陰陽剛柔などとなすも、或ハ此類にやと思はる。次ぎには、神學上の説明に、數を假るものにて、ニコラウス、クザヌスが、三位一体説をば、三角にて証明せんと試みたるが如し。又其の次ぎハ、幾何學上の觀念より脱化せるものにて、十七世期の英人ヘンリー、モールと呼べるが、三箇のダイメンシヨンの外に、第四のダイメンシヨンありと論じ、これを以て、幽靈や神使の住所となせしが如きは、其の著しき例なり。この事ハ、數年前の東洋學藝雜誌に、菊池博士が、平面圖の話と題する講演の筆記あれば、就きて見られたし。

(未完)